

龍谷大学所蔵青木文教師収集資料について

三 谷 真 澄

はじめに

青木文教師は、一九一三年一月二十二日、チベットの首都ラサに入った。日本人としては、河口慧海（一八六六一九四五）、寺本婉雅（一八七二一九四〇）、矢島保治郎（一八八二一九六三）について四人目のラサ到達であった。^①決して「潜入」や、「密入国」ではなく、当時のダライラマ一三世の特別の配慮があつての入蔵であつた。それは、大谷光瑞師（一八七六一一九四八）による派遣であつたからであり、当時のイギリス、ロシア、中国の動向に注視しなければならぬ緊迫した状況の中で、きわめて異例の厚遇といえるであろう。仏教国であるチベットの最高指導者と日本最大級の仏教教団である浄土真宗の宗主との関係がいかなるものであつたかが知られる。

光瑞師の派遣した大谷探検隊は、一九〇二年から一九一四年までの三次にわたる探検により、各種言語文献や地理・考古・美術文化資料など多くの文物を収集したが、二〇〇一年から二〇〇三年にかけ、宗門校・龍谷大学では、「仏の来た道」の統一テーマのもと、四回の学術講演会および学術討論会が開催された。^②

いわゆるシルクロードを中心とする「西域」探検は、光瑞師の調査事業の中でも最大の成果をあげたものと言

ってよい。しかしこの地域以外にも、仏教発祥の地・インドの他、仏教伝播の地・中国、ビルマ、さらに、当時一般にほとんど知られていなかったチベットなど、その領域はアジア全域にわたっていた。広義の大谷探検隊にはチベット踏査も当然含めるべきであって、青本文教（一八八六―一九五六）や多田等観（一八九〇―一九六七）の事跡も、これに沿って理解する必要がある^③。

他の列国の中央アジア探検が、国家的事業や博物館などの企画であつたのに対し、大谷探検隊は光瑞師個人の事業であり、しかも西本願寺の新門・法主（宗主）という仏教者の立場で、仏教伝播の足跡と現状を踏査したことに特色がある。その意味で、チベットが調査領域に入っていたのは当然であろう。

一 大谷探検隊と青本文教師

大谷探検隊が収集した資料の内、西域資料については、現在、中国・韓国・日本に分散して保管されている。中国では旅順博物館、中国国家図書館、韓国ではソウル国立中央博物館に蔵され、日本では、東京国立博物館、京都国立博物館、龍谷大学学術情報センターに蔵されるほか、個人・機関の手にあるものもあり、その全体像の把握は未だ十分ではない。青木の収集したチベット文化資料も、本来光瑞師のもとに集められ、保管されるはずであつたが、種々の事情から、当時、神戸在住であつた小倉捨次郎氏に託され、その後、大部分が国立民族学博物館と龍谷大学に蔵されることになった。

青本文教師の事績

青木と多田はともに、光瑞師の命によりチベット入りを果たしたのであるが、二人のチベットでの生活は対照

的であった。多田が、セラ僧院において十年にわたってチベット仏教の学修を行ったのに対して、青木は、後に述べるように、三年間ラサの上流階級の家に寄宿し、チベットの実社会を観察し、一九一〇年代初頭の「チベット文化」に直接ふれる生活を送ったのである。

前半生とチベット入境まで

青木は、一八八六（明治一九）年九月二十八日、滋賀県常磐木村（現・高島市安曇川町常磐木十八川）の正福寺で、父・覚生、母・きくの長男として誕生した。安曇高等小学校尋常科、同高等科、京都府立第二中学校を卒業後、一九〇七（明治四十）年四月、仏教大学（現在の龍谷大学）に入学した。満二〇歳であった。在学中、二十三歳の青木に転機が訪れた。一九〇九（明治四十二）年九月、光瑞師の命により、仏教大学を中退し、インドに派遣されたのである。インドのカルカッタに留まり仏教遺跡調査に従事していた青木に、ロンドンにいた光瑞師からたいへんな命令がもたらされた。チベットからインドに向け出発し、ダーズリンへ留まっていたグライラマ一三世と会見せよとのことであったのである。大役を任された二四歳の青木は、単身乗り込み、三四歳のグライラマと会見、交換留学生の約束を果たしたのである。これには一九〇八（明治四十一）年七月三十一日、山西省五台山にて、グライラマ一三世と大谷尊由氏（光瑞師の実弟）が会見し、すでに友好関係の約束がなされていたことが大きく関係している。ともかくも、これまで寺本婉雅など大谷派を中心として運んでいた日本側のチベットとの窓口が、本願寺派に転換したことを意味している。

その後、光瑞師の命によりイギリスへ赴き、約一年間ロンドンの教育事情の調査に従事していたが、一九七七（明治四十四）年春、グライラマの親書により、ダーズリンで会見、チベットから日本への留学生が決定するまで、二か月間インド仏跡の調査をなした。同年五月、ツァワ・ティトゥル僧正（三十歳）が日本へ派遣されるこ

とになり、青木の案内で京都・西本願寺に到着した。僧正は、時の政治状況から身分を隠しながら、京都西本願寺や神戸二楽荘に留まり、青木や多田にチベット語を教えていたが、突然の帰国命令があり、青木の他、多田・藤谷晃道も同行し、一月二十三日に神戸出帆した。僧正の日本滞在は九か月であった。一九一二年（明治四十五年）年三月、カリンボンで、ダライラマと共に滞在。僧正を師としてチベット語の学習を進め、六月、ダライラマより、入蔵認定証と旅券が下付される。青木は「トゥプテン・タシ」というチベット名を与えられた。

六月二十四日、ダライラマ、チベットへ出発した後、改元し、大正元年となった同年九月九日、青木はチベットへ向け、出発した。この時の状況は、龍谷大学所蔵資料にも記されている。カリンボン↓ダージリン↓イラム↓タシラカ↓シガツェ↓チュンコルヤンツェ（ダライラマ在所）に到着。十月十六日、ダライラマと会見、翌年一月十二日まで滞在した。

ラサでの生活

チベットの都・ラサに到着したのは、一九一三（大正二）年一月二十二日であった。青木は、その時の状況と感激を以下のように記している。

「市街の取付に石造三階の大きな家がある。ヤプシイブンカン^⑤という貴族の家で、前代の一ダライ法王を出した由緒ある名家である。かような著名の屋敷が予の住居に定められてあろうとは夢にも想像しなかった。南面せる正門に廻り馬より下つて中庭にかかると、当家の家従が丁寧に予を出迎えて、三階なる主人の居間に案内する。ここで主人のティチ侯に初対面の挨拶を述べ、わが居間にあてられた西殿というに導かれた。大正二年（一九一三年）一月二十二日午後四時のことである。ああ予が幾年か空想を走せた目的地、すべて予想外の状況にみてる天地、世界の探検家が死力をつくして接近せんと試みた外人禁制の都、「雪有邦土吐国」の中心、「妙法刹土の称

ある神仏のいませる聖都ラッサ」は、ここに予をして無上の満足をもってひと先ず長途の旅装を解かしめたのである。^⑥

青木はこうして、二十六歳から二十九歳の三年間をラサで過ごすことになった。ラサでの生活については、「時々法王の下問に答え、内外の諸新聞によつて海外の重要事件につき奏上し、あるいはその記事を翻訳して送呈するの義務があつた。」^⑦とし、同時期に滞在していた多田も、「青木さんは、学究の暇には世界ニュースを法王庁に呈供した。当時、第一次欧州大戦中であつたが、欧州の事情に闇いチベット政府の要路者は青木さんの解説によりどれ程啓蒙されたか測り知れぬものがあつた。」^⑧と述懐しており、ダライラマの秘書的な役割にあつたことが知られる。

山口瑞鳳氏は「ラッサに於ける青木の勉学は俗学の分野に限られていた。」とされ、「文字による学問は文法学、修辞学、歴史学を主とした。その他は、風俗、習慣、名勝、遺蹟一般の手広い観察であつた。」^⑨と、青木の活動範囲が市井にあつたことを分析している。こうして自由に「ラッサ社会の祭式儀礼」に参加することにより、チベット人の生の姿にも触れることができたのである。また「写真に興味を持ち」、「カメラ」を自在に操る青木は、チベットの「活社会」を写真に納めることができた。これも三年間の重要な成果の一つであつた。^⑩

後半生↳ラサ出発以後

一九一四（大正三）年五月、光瑞師が本願寺派宗主を辞し、後ろ盾を失つた青木は、一九一六（大正五）年一月二十六日、ラサを出発。ナガルツエ↓ギャンツエ↓シガツエ↓ギャンツエ↓サマダ↓パリ↓チュンビ↓カリンボン↓カルカッタを経由し、一九一七（大正六）年四月帰国。後、写本カンギユルの宛先を巡り、河口慧海と論争した（大正の玉手箱事件）が、最後は青木が身を引く形で収束せざるを得なかった。一九一八（大正七）年二

月、事件を避けるように、東南アジア諸国に派遣され、五年間、ジャワの熱帯農業の実践調査などに従事したが、チベット関連では、京都大学でチベット語の調査研究をしたり、晩年になって、多田の後を襲うかたちで、一九五一（昭和二十六）年、東京大学文学部チベット語講師に就任したことが特筆される程度である。その間、外務省調査局嘱託として、チベット関係の調査に従事したり、連合軍総司令部民間情報局に教育顧問として勤務したが、チベット学者としては報われない人生であったといえよう。一九五六（昭和三十一年）十一月七日、満七十歳で亡くなった。

二 青木文教師収集資料について

先に、同時期にラサに滞在した多田と青木の生活が対照的であったことを紹介したが、その収集品にも相違が現れている。多田が、チベット大蔵経をはじめ計二万四二七九部に達するチベット語仏教典籍を将来したのに対し、青木の収集品は、チベット文化資料と呼ぶべき性格のものである。いくつかの歴史的な不幸が重なり、青木の収集品リストにチベット大蔵経が挙げられることはない。

青木が日本に将来し、所蔵確認されている資料は、河口や多田のそれと比較すれば、規模としてはたいへん小さなものである。また、その収集資料については、光瑞師の派遣した西域探検の収集資料がたどったのと同じ軌を一にして、各所、各研究機関に分散して蔵されている状況である。現在、その所在が明確なものとしては、東京大学文学部（インド哲学研究室）、国立民族学博物館、龍谷大学学術情報センター大宮図書館所蔵分がある。その概要と目録を示しておく。

所蔵一覧

① 東京大学所蔵チベット語文献

13点（整理番号3、264、286、288、294、302、322、323、324）

北村甫『東京大学所蔵チベット文献目録』東京大学文学部印度哲学印度文学研究室、一九六五・一一

② 国立民族学博物館所蔵資料

全142点（うち文献資料 52点）

長野泰彦編『国立民族学博物館蔵青木文教師将来チベット民族資料目録』『国立民族学博物館研究報告別冊』第1号、一九八三・三

③ 龍谷大学大宮図書館所蔵資料

60品目（うち文献資料 41点）

龍谷大学大宮図書館『青木文教師将来チベット文化資料』二〇〇〇・三（内容リスト）

①は、辻直四郎博士を研究代表者とする、昭和33・34年度文部省科学研究費交付金機関研究「チベットおよび周辺地域の宗教と社会生活」として、多田等観師収集・寄贈のチベット文献（ラサ版カンギル、ナルタン版テングル、デルゲ版テングル、紺紙金泥聖般若波羅蜜多八千）とともに、購入されたものである。これはすべて文献資料であり、購入の経緯等については記されていない。

斎藤明氏によれば、東京大学蔵チベット語写本・刊本には、「総合図書館蔵チベット語文献」と「文学部蔵チ

ベツト語文献」とがあり、青本文教収集の13点のチベツト語文献は、後者になるこのことである。^⑩これに関する唯一のリストとして、第13回日本西藏学会に際して公刊された目録によると、内容は、整理番号3が、「聖なる無量光の莊嚴と名づける大乘經」である他は、いわゆる蔵外文献である。

②は、国立民族学博物館によつて購入されたものであり、佐々木高明氏によると、「神戸市在住の小倉捨次郎氏が所蔵されていたものを、同氏の御希望により、昭和53年11月18日に本館に搬入、整理・評価などの作業を終えたうえ、翌54年8月17日に正式に受入れたものである。その間、資料の紹介、旧所蔵者の小倉氏との仲介、さらには資料の整理などに、お骨折り頂いたのは兵庫県立近代美術館副館長（当時）の増田洋氏である。」^⑪と来歴が明記されている。

このとき購入した全142点が、仏教図像（7点）、仏教図像白描（6点）、仏像（6点）、仏教儀礼用具（27点）、民具・生活用具（14点）、衣類（21点）、書籍類（洋装本 9点）、文献（チベツト式のペチャ 52点）と分類されている。この内容については、昭和56・57年度国立民族博物館共同研究「青本文教師将来チベツト文物の研究」により明かとなり、すでに一九八三年に公刊されている。それによると52点のチベツト語文献資料は、標本番号が付せられており、例えば目録番号90の文献はH64694、同141はH64714となっている。一標本中に複数の文献が収められている場合は、（I）（VI）のローマ数字が付してある。内容は「蔵内文献（チベツト大蔵經に入っている文献）は二点のみで、他は全て蔵外文献である。」とされ、「青本文教収集資料の特徴のひとつ」とされている。

③は、先に②でも示した小倉氏所蔵資料の中で、「小倉氏の御希望と博物館側の整理の都合により、若干のも

のが、その後も小倉氏の手許にとどめられることになった。^⑬」として、そのリストが挙げられている。これが、龍谷大学が一九九九年度及び二〇〇〇二年度に購入した資料とほぼ一致するものである。

この龍大資料と民博資料とを合わせれば、旧小倉捨次郎氏所蔵資料のほぼすべてがそろうことになる。

三 龍谷大学所蔵青木文教師収集資料

龍谷大学が所蔵する資料には、大きく分けて、(A)チベットで青木が収集し、日本にもたらしたチベット文化資料と、(B)青木自身の事跡に関連した資料、との二種がある。その内訳は以下の通りである。

(A) 青木文教師収集チベット文化資料

ラサ鳥瞰図1点、チベット語文献（貝葉）41点、ダライラマ法王親翰一式、チベット貨幣10袋、チベット切手3袋、玉類・装飾品8点、石斧1個、チベットの石8個、ラッサ・セラ方面の川砂1包、小石5個、西藏麝香2瓶、チベット土面5点、紙製工芸品4枚、チベット地図1枚、チベット植物標本86点、チベット仏画（タンカ）1点

(B) 青木文教師関連資料

チベット語語彙カード28袋、チベット関係新聞記事切抜集1束、青木文教師メモ帳並びに手帳6冊、皇朝藩属興地叢書六帙48冊、ダライラマ法王逝去ノ記事1枚、ダライラマ関連書簡類（下書）1式、仏教講義録（チベット語本）8冊、非チベット品「写真立」1点、青木文教師関連書簡類一式

(A)のうち、「ラサ鳥瞰図」は、(A)、(B)いずれにも分類しがたいが、チベット文化圏からの将来品という意味を

考慮し、(A)に分類した。

傍線を施していない資料群は「青本文教師将来チベット文化資料」として一括登録されているもので、二〇〇〇（平成十二）年三月に龍谷大学大宮図書館蔵となったものである。さらに、二〇〇二年度になって新たに「チベット植物標本」86点と「チベット仏画（タンカ）」1点、及び青本文教関連書簡一式が購入された。これにより、青木が収集した「チベット文化資料」(A)が増補され、彼の事跡を語る資料(B)も追加されたことになる。

以下、主要な所蔵品について解説する。

チベット語文献資料

○通し番号 I—XXXXX（ローマ数字がマジックで書かれている）

・Ⅻの所在不明、通し番号のないものの中のの一つか。

・XIIIと番号の付されたものが二冊あり、一方は鉛筆書きである。
ただ内容は別のものである。

・最後のXXXXIIIからXXXXVIIまでは、メモ用紙に書かれている。

繭山龍泉堂によって記入されたものではない。タイトルがタイプで打たれているものもある。（民博の研究
者によるものか）

○全37帙（XXXXIIIからXXXXVIIまでは一帙としてくくられている）

総細目数も含めた総タイトル数は未確認であるが、ひと綴りに結ばれたものが、37冊ある。その中には、一帙に多くのタイトルを含むものもあり、同本二冊が一帙におさめられているものもあるので、具体的な内容細目に

については事後作業が必要である。

また、通し番号がなく一帙にまとめられているものが4帙あり、仮りに番号AからDを付しておいた。(添付資料「仮番号A～D」)

○資料の内容

北京版などに同定できる経緯もあるが、蔵外文献がほとんどである。

○資料の形式

すべて楷書体(ウチェン)で印刷された貝葉スタイルであり、最大のもので、横60・5cm×縦9・8cm(Ⅱ)、あるいは56・2cm×12・3cm(Ⅲ)、最小のものは、24・5cm×7・0cm(Ⅳ)となっている。

ラサ鳥瞰図 the bird's eye sketch of Lhasa

134cm×168cm 龍谷大学大宮図書館蔵(青木正信氏の寄贈)

一九〇五年から一九一五年までのラサ市を鳥瞰的に描いた地図で、青木が滞在した一九一三年から一六年にかけてのラサの状況を示す貴重な資料である。最上部には//gangs ljongs bod rgyal khab dbus su gyur pa dpal gyi chos 'khor lha ldan zhing gi bkod pai sa kra// (雪域西藏国中央(ウー)に成就した吉祥なる法輪・ラデン(ラサの別名)の地を配した地図)とタイトルが書かれている。

地図上方が東を示し、地図上部中央にトゥルナン寺(チョカン寺)・左上にラモチェ寺、左下にポタラ宮、右に流れている川は、キチュ河である。また鳥瞰図の下に、チベットの位置やラサの位置を示す、縮尺の異なる四枚の地図が切り貼りされている。下部中央には青木により英文でラサ市略史が書かれており、ソンツェンガムポ王による仏教導入期の七世紀前半に建設されたこと、昔「ra sa (ヤギの地)」と呼ばれ、これが「lha sa (神の

地」となったこと、チヨカン寺の釈迦牟尼仏像の由来などが示されている。

また右下に“THE BIRD'S EYE SKETCH OF “LHASA” BY A NEPALESE PHOTOGRAPHER OF LHASA IN 1905-1915”と書かれており、この鳥瞰図作成にネパール人が関与していたことがわかる。

青木文教手帳及びメモ帳 the Aoki Bunkyo's pocket notebooks and diaries

一九一一年メモ帳 (8・0 cm×11・7 cm)・一九一二年メモ帳 (8・5 cm×13・1 cm)・一九二一～二四年、一九一六年手帳 (縦7・9 cm×横13・7 cm×厚さ1・1 cm) 龍谷大学大宮図書館蔵

青木の使用した手帳及びメモ帳である。6冊のうち4冊は、“The ‘Welcome’ Photographic Exposure Record and Diary” (BURROUGHS WELLCOME & CO. LONDON) であり、一九二一年～一九一四年と一九一六年版があり、黄緑色の装幀である。ここには青木のラサ滞在前後の自筆メモが記入されている。旅行の準備品や、日本の二楽荘から香港、シンガポール、ペナン、カルカタ、ダージリン、カリンポンからチベットへおもむき、タシラカ、サル、タシルンポ僧院、シガツェ、ティトウルリンポチェの家、チュコルヤンツェ僧院、そしてラサヘという旅程、及びチベット暦との対照やチベットの気候などが記されている。一九一三年版一月二十一日(チベット暦二月一五日)の項には、“I arrived at Lhasa.”(私はラサに到着した)と記されているが、ラサ滞在した一九一四年版の日記部分が欠損している。

残りの2冊は、一九一一年発行の二月二十八日発行の三井銀行関係の深緑色メモ帳(マス目)と、一九二二年印刷と推測されるオーストリア製の黒色メモ帳(横罫)である。これらは破り取って使用されたりしく、残された部分にはほとんど情報はない。

チベット語語彙カード the cards of Tibetan vocabulary

縦8・5 cm × 横14・7 cm × 15・4 cm 龍谷大学大宮図書館蔵

本資料は、チベット訳『無量寿経』『阿弥陀経』の語彙カードである。テキストから単語を収集し、チベット語の基本文字ごとに分類し、基字を大書した袋に入れて整理されたものである。二八文字分しかないのは ja、na の袋がないためであるが、テキストには単語が存在するので、いつかの時点で紛失してしまったと考えられる。また wa 字の袋にはカードではなく、貝葉形写字本5葉（手習いか）が挿入されている。従って ja, na, wa を除く27の基字について、1枚から59枚のカードが入られ、総計576の語彙が取られている。

これがいつの時点で書かれ整理されたのかは不明であるが、青木は『大乘』誌に両経典の和訳を掲載（「仏説阿弥陀経の西藏文和訳を紹介す」『大乘』1:12, pp. 37-53. 大乘社、一九二二年十二月、「大無量寿経の西藏訳」同2:3, pp. 39-50、一九二三年三月）しており、このカード作成との関係を伺わせる。

「辞書用メモ」にしては、用語が限定されており、他のテキストの用例なども併せ、本格的な辞書作成の目的の途上にあったのか、浄土經典のチベット語学習用語彙にとどめようとしたのかも不明である。

いずれにしてもグライラマ13世に仕えるほどチベット語に堪能であった青木が「携帯用チベット語字引」を必要とするはずはなく、また用例も限定されており、「チベット語訳浄土經典の語彙カード」とするのがふさわしいと考えられる。

チベット関係記事切り抜き集 the newspaper clippings connected with Tibet

42片 龍谷大学大宮図書館蔵

“THE STATESMAN” 記事の切り抜き集である。主としてチベット情勢の記事を収集したもので、一九一

二年九月十日から一九一三年一月十一日までの記事が、計42片一括りにしてある。日付不明のものもあるが、内容から推して、この期間に入るであろう。THE STATESMANは、一八七五年にカルカッタで創業したインドの英字新聞である。この間のイギリス、中国、チベットの政治状況や、明治から大正に改元したばかりの日本の状況など、特派員報告が掲載されている。青木がラサに入ったのは一九一三年一月二十二日であるから、直前まで世界情勢をこの新聞記事によって得ていたものと考えられる。

チベット植物標本 the herbariums of Tibet

標本台紙 27・1 cm×38・7 cm 及び 25・5 cm×36・2 cm 龍谷大学大宮図書館蔵

「主トシテ拉薩及其附近ノ高山（二五〇〇—一六〇〇）大正二年ヨリ四年迄採集」とあり、台紙に添付された自筆のメモによると一九一二年から一九一五年までにラサで青木が採集した計八六六の植物標本である。

二〇〇二年度に新たに大宮図書館蔵となったものである。『旅行教範』二八七項に、「動植物はその標本を成るべく採集すべし」とあり、この指示に従ったものであろう。第三次隊の吉川小一郎採集の「新疆ウイグル自治区天山植物」（龍谷大学大宮図書館蔵）と平行する資料として、品種名などの調査研究が進められつつある。

小倉捨次郎氏によるリストには「83 チベット高原の植物標本約百種」として「採集地域は、チベット・ネパールのヒマラヤ山脈地帯で、海拔八、〇〇〇呎から、チベット高原のラッサに至る途中で海拔一七、〇〇〇呎に達する部分の各所で採集されたものである。」とされている。他の「青本文教師将来チベット文化資料」と同様、小倉捨次郎氏の旧蔵資料であり、一九一〇年代前半のヒマラヤの植生を知る上で貴重な資料である。

釈迦如来三十五仏画（タンカ） thangka of Shakyamuni with 34 Buddhas

キャンヴァス寸法 46・6 cm × 65・0 cm 外形寸法 73 cm × 138 cm 龍谷大学大宮図書館蔵

中央の本尊は、触地印を結んだ釈迦如来であり、その周囲に34の仏が描かれた、「釈迦如来三十五仏」のタンカである。タンカとはチベット仏教美術の世界における軸装仏画のことであり、キャンヴァスを取り囲む赤と黄色の縁、全体をおおう包布、「風抑え」と呼ばれる紐が付随している。この表装様式によれば、十四―十五世紀の作ではなく近現代の作のようである。^⑮

青木がどこでどのように入手したかは不明であるが、これも小倉捨次郎氏の旧蔵資料リストの中に見いだされるものである。

終 わ り に

東大文学部所蔵文献、民博所蔵資料及び、龍大所蔵資料とを合わせると、青本文教師が収集したチベット文化資料がどのような性格のものであるかがおぼろげながらわかってくる。それは、一九一〇年代初頭の「チベット文化」そのものである。

山口瑞鳳氏は、「チベットに入った人々のうちで、チベットの仏教そのものに深い理解を示していたのは、何としても、滞在のもっとも長かった多田であった。後のチベット学に関する貢献については青木も加わる。」^⑯とされ、「チベット学」への貢献という点で青木を評価しておられる。

青木は、一九一三年から一六年までの三年間、ラサに滞在し、当時のチベット仏教文化に触れる生活を送った。彼のもたらした資料は、当時の仏教学者にはがらくたに見えたかも知れない。しかし、仏教文化資料として一級の価値があることは疑いなく、また青木自身が見聞した二十世紀初頭のチベットの記事は、現在の私たちの目か

らは貴重な同時代資料である。所在の判明している資料以外にも、個人蔵などまだ所蔵の明らかでない資料も現存するであろう。今後も青木のチベット文化資料の収集と、地道な調査研究を行っていかねばならない。彼の遺した資料の調査を進めるとともに、チベット学およびチベット仏教文化学の一里塚として、青木の事跡を再評価していく必要がある。

参考文献

- 日本西藏学会「青木先生略歴」『日本西藏学会々報』5、1958
長野泰彦編「国立民族学博物館蔵青本文教師将来チベット民族資料目録」『国立民族学博物館研究報告別冊』第1号、1983
山口瑞鳳『チベット上』（東洋叢書3）東京大学出版会、1987
江本嘉伸『西藏漂泊―チベットに魅せられた十人の日本人（上）（下）』山と溪谷社、1993、1994
安曇川町教育委員会編『青本文教』滋賀県安曇川町、1994
青本文教『秘密国チベット』芙蓉書房出版、1995
日本人チベット行百年記念フォーラム実行委員会『チベットと日本の百年』新宿書房、2003

青本文教師の著作

単行本

- ・『秘密之国西藏遊記』内外出版、1920.10.19
- ・『西藏原本大無量寿経国訳』光寿会、1928.12.25印刷、12.30.発行（非売品）龍大所蔵本

- ・『西藏遊記』商務印書館、1931
- ・『西藏文化の新研究』有光社、1940.12.1
- ・『西藏の民族と文化』高原社、1942.12.20
- ・『西藏全記』（外務省調査資料）1945
- ・『西藏語学』（外務省調査資料）1947
- ・『Tibetto no tabi』ローマ字教育会、1950.12.20(PERIKAN BUNKO)『なぞの国チベット』
- ・『チベット文典』（手稿）1952
- ・『Study on early Tibetan Chronicles regarding discrepancies of dates and their adjustment』（手稿）1955.10
- ・『西藏―第一部西藏遊記、第2部チベット文化の新研究』（復刻）芙蓉書房出版、1969
- ・『西藏』芙蓉書房出版、1987.3
- ・『秘密の国西藏遊記』（中公文庫）中央公論新社、1990.2
- ・『秘密国チベット』芙蓉書房出版、1995.12.10

論文・随筆など

- ・『現今の西藏』『六条学報』189.p.63-71.京都西六条私立仏教大学内壬寅会、1917.7.10.
- ・『西藏の建国より仏教が伝来するまで』『大乘』（大谷光瑞主宰）1:5.p.37-52.大乘社、1922.5.1.
- ・『西藏仏教に現はれたる極樂願生偈の翻訳』『大乘』1:7.p.43-53.大乘社、1922.7.1.
- ・『西藏所伝の観音菩薩の研究』『大乘』1:8.p.41-55.大乘社、1922.8.1.
- ・『龍樹菩薩の極樂願生偈を論じて西藏密教の浄土思想に及ぶ』『大乘』1:11.p.15-27.大乘社、1922.11.1.

- ・「仏説阿弥陀經の西藏文和訳を紹介す」『大乘』1:12. pp. 37-53. 大乘社、1922. 12. 1.
- ・「大無量寿經の西藏訳」『大乘』2:3. pp. 39-50. 大乘社、1923. 3. 1.
- ・「西藏の仏教史概説」『大乘』2:4. pp. 37-59. 大乘社、1923. 4. 1.
- ・「西藏訳般若波羅密(ママ)多心經」『大乘』2:5. pp. 38-46. 大乘社、1923. 5. 1.
- ・「般若八千頌所說の大乗と小乗」『大乘』2:6. pp. 32-44. 大乘社、1923. 6. 1.
- ・「鳥葬の話」『大乘』2:7. pp. 91-94. 大乘社、1923. 7. 1.
- ・「西藏所伝王舍城所說無量寿經邦訳」『大乘』5:3-5. pp. 30-52. 39-64, 30-49. 大乘社、1926. 3. 1-5. 1.
- ・「西藏所伝金剛般若波羅蜜經邦訳」『大乘』5:6-8. pp. 32-41, 24-33, 21-32. 大乘社、1926. 6. 1-8. 1.
- ・「西藏研究の興味」『边疆支那』1:2. pp. 72-81. 边疆問題研究所、1934. 9. 1.
- ・「故岡部庸三郎博士を偲ぶ―故岡部先生の蘭領印度在留當時を憶ふ」『大乘』19:7. pp. 38-40. 大乘社、1940. 7. 1.
- ・「西藏問題の重要性を論ず」『大乘』19:12. pp. 41-52. 大乘社、1940. 12. 1.
- ・「西藏の「聖徳太子」宗弄讚幹普大王」『大乘』20:2. pp. 23-34. 大乘社、1941. 2. 1.
- ・「西藏の神話と伝説(1)-(5)」『大乘』20:4, 6-9. pp. 25-32, 23-28, 23-30, 35-42, 27-31. 大乘社、1941. 4. 1, 6. 1-9. 1.
- ・「喇嘛教に関する諸考察(1)-(2)」『蒙古』108-109. pp. 2-25, 2-25. 善隣協会、1941. 6. 1-7. 1.
- ・「チベットの神教と仏教」『世界仏教』237. pp. 56-59. 1953. 10.
- ・「チベット文化財の保存」『読書春秋』5:1. pp. 6-7. 国立国会図書館内春秋会、1954. 1. 1.
- ・「チベットの観音信仰」『大法輪』21:2. pp. 142-147. 大法輪閣、1954. 2. 1.

・「チベット語の本質について」『言語研究』26・27. pp. 183-185+194. 日本言語学会、1954. 12. 25.
・「ラマ教の発生と発展」『歴史教育』4: 8. pp. 1-10. 歴史教育研究会、1956. 8. 1.
以上は、「青木文教師業績」民博報告〔1983〕p. 251「青木先生略歴」〔1958〕のほか、東洋文庫ホームページなどを参照して、筆者がまとめた。

青木文教師関連書籍・論文

- ・多田等観「ラッサ時代の青木文教さん」『日本西蔵学会々報』4. pp. 1-2. 日本西蔵学会、1957. 10. 25.
- ・佐藤長「京都における青木先生の二人の弟子」『日本西蔵学会々報』4. pp. 2-3. 日本西蔵学会、1957. 10. 25.
- ・中根千枝「青木文教先生の御逝去を悼む」『日本西蔵学会々報』4. pp. 3-4. 日本西蔵学会、1957. 10. 25.
- ・日本西蔵学会々報編輯部編「青木先生略歴」『日本西蔵学会々報』5. p. 3. 日本西蔵学会、1958. 9. 25.
- ・北村甫『東京大学所蔵チベット文献目録』東京大学文学部印度哲学印度文学研究室、1965. 11
- ・長野泰彦編『国立民族学博物館蔵青木文教師将来チベット民族資料目録』2+iv+251p. 国立民族学博物館、1983. 3. 1. (国立民族学博物館研究報告別冊1)
- ・佐々木高明「青木文教師とそのチベット将来資料」(前掲民博目録) pp. 173-183
- ・小野田俊蔵「チベット所伝の浄土観想修法—青木文教師将来資料 Nos. 103, 104, 107, 108, 109 についての管見」(前掲民博目録) pp. 184-192
- ・中谷英明「青木文教師将来シンハラ写本、及び、同写本中の「転法輪経」について」(前掲民博目録) pp. 193-204
- ・森田恒之「青木文教師将来チベット仏画の色彩と彩色技術」(前掲民博目録) pp. 205-249

- ・長野泰彦「青本文教師年譜」(前掲民博目録) p. 250
- ・長野泰彦「青本文教師業績」(前掲民博目録) p. 251
- ・山口瑞鳳『チベット上』(東洋叢書3) 東京大学出版会、1987
- ・江本嘉伸『西藏漂泊―チベットに魅せられた十人の日本人(上)(下)』山と溪谷社、1993、1994
- ・安曇川町教育委員会編／さいわい徹脚本・画『青本文教師ふるさと伝記まんがシリーズ③』1994. 3. 18
- ・龍谷大学大宮図書館「青本文教師将来チベット文化資料」2000. 3. (内容リスト)
- ・井ノ口泰淳「大谷光瑞とインド・チベット」『シルクロードと大谷探検隊』(『季刊・文化遺産』第11号春・夏号) 財団法人島根県並河萬里写真財団、2001. 4. 20 pp. 62-64
- ・日本人チベット行百年記念フォーラム実行委員会『チベットと日本の百年』新宿書房、2003. 3. 30
- ・龍谷大学学術情報センター編『大谷探検隊100周年記念シンポジウム「チベットの芸術と文化」記念展観図録』(服部等作・白須淨眞・三谷真澄) 2002年9月10日〜21日 龍谷大学大宮図書館
- ・三谷真澄「大谷探検隊と青本文教師―二〇世紀初頭のラサ」『アジア遊学』42 (特集ラサ―天空の世界遺産都市) 2002. 8. 5, pp. 70-81

大谷探検隊関連文献

- ・小田義久・百済康義監修、龍谷大学図書館編『龍谷大学図書館特別展「シルクロード・中央アジアを巡った探検家たち―大谷ミッシェンを中心として」』2000. 10
- ・龍谷大学監修、東映株式会社編集発行『世紀を越えて今蘇るシルクロード西域文物展―大谷光瑞と中央アジア探検紀行』2001. 3

・『シルクロードと大谷探検隊』（『季刊・文化遺産』第11号春・夏号）財団法人島根県並河萬里写真財団、2001.4.20

・小田義久・百済康義監修、龍谷大学編『大谷探検隊100周年記念国際シンポジウム特別展「シルクロード・中央アジアを巡った探検家たち―大谷ミッシェンを中心として」』2001.5（再編集）

付記

現在、東洋文庫に保管されている河口慧海将来「テンパンマ」写本カンギュルがある。これは本来、青木文教を通じて、大谷光瑞師のもとに寄贈されるはずのものであったが、一足先に帰国する河口慧海に託したため、河口慧海将来資料として扱われることになってしまった。後に、青木文教との間で、その帰属問題が、中外日報紙上で争われた。いわゆる「大正の玉手箱」事件である。

このことについて、最近、江本嘉伸氏および、山口瑞鳳氏は、やはり青木の方に軍配が上がるとされている。河口慧海は当時、日本人として最初にラサに入った人物として、マスコミの寵児であったであろう。青木文教が、いかに友好的に入蔵し、特別な計らいによってラサに滞在したとはいえ、日本での知名度には雲泥の差があった。同時期にラサに滞在した4人の日本人の中で、大谷光瑞師の派遣による二人と他の二人とは、ラサでの扱いは違っていたであろう。青木文教を秘書として優遇し、多田等観を僧院で修行させたのであるから、当時のドライラマ13世と大谷光瑞師の関係がどれほどのものであったかが知られる。その、チベット仏教の最高指導者から日本の巨大な仏教教団の宗主に贈られる品である。版本から印刷される版本大蔵経と、手書きで書写された写本大蔵経とは、どちらに価値があるか、あるいはカンギュル（それは仏そのものであるといわれる）とテンギュルとでどちらが、贈呈品としてふさわしいか。「写本カンギュル」は、金銭的数値に換算できない、宗教的価値が

あることを指摘すれば充分であろう。

追記

筆者は上山大峻博士に従って、一九九八(平成一〇)年九月二日、東京繭山龍仙堂に趣き青本文教師関連資料の通覧を果たした。また、二〇〇〇(平成一二)年一月二日から二二日には、チベット蔵外文献を中心とする事前調査を行うことができた。龍谷大学が二〇〇〇年度に購入した資料が、これであり、さらに、大谷探検隊派遣一〇周年に当たる二〇〇二年度に購入した資料とを併せると、チベット関連資料を相当数保管することになった。このたび、博士の定年退職に当たり、博士の強い願いによって龍谷大学図書館に同資料が収蔵されることになったという理由から、博士の定年退職記念号に掲載させていただくことにした。

国内大学の中で、大谷探検隊関連資料を保管する唯一の研究機関として、これまで不十分であったチベット調査部門が補完されることになったのは、博士のご熱意とご示唆によるところが大きい。ここに記して感謝の意を表したい。

註

① チベットに入った日本人は、以下の3グループに分けられる。

第1グループ……明治時代(ダライラマ13世の時代)

能海 寛 (1868-1901) ……真宗大谷派

河口 慧海 (1866-1945) ……黄檗宗(一時還俗) 1900.3.31ラサ到達

寺本 婉雅 (1872-1940) ……真宗大谷派 1901.12.8ラサ到達

成田 安輝 (1864-1915) ……外務省命(法衣擬装)

第2グループ……………大正時代（ダライラマ13世の時代）

矢島保治郎（1882-1963）……………冒険旅行（日本力行会）1911.3.4ラサ到達

青木 文教（1886-1956）……………浄土真宗本願寺派 1913.1.22ラサ到達

多田 等観（1890-1967）……………浄土真宗本願寺派 1913.9.20ラサ到達

（河口慧海）……………2度目 1914.8.7ラサ再到達

第3グループ……………太平洋戦争前後（ダライラマ14世の時代）

野元 甚蔵（1917-）……………1940.1ラサ到着

木村肥佐生（1922-1989）……………1945.9.2ラサ到着

西川 一三（1918-）……………1945.10ラサ到着

山口瑞鳳『チベット上』（東洋叢書3）東京大学出版会、1987, pp. 61-108 参照。

江本嘉伸『西藏漂泊―チベットに魅せられた十人の日本人（上）（下）』山と溪谷社、1993.1994 参照。

② 1 公開シンポジウム「現代シルクロードとイスラーム復興」―「文明間の対話」―の視点から（日本中東学会第17回年次大会）および研究発表

日程…2001年5月12日（土）・13日（日）

会場…龍谷大学大宮学舎清和館

2 「日・中・韓の研究者による国際学術講演会・仏の来た道―シルクロードの文物」

日程…2002年5月23日（木）・25日（土）

会場…本願寺築地別院（東京）・本願寺聞法会館（京都）

3 「チベットの芸術と文化―その現在と未来」

日程…2002年9月13日（金）・14日（土）

会場…龍谷大学大宮学舎清和館

4 「シルクロード文物と現代科学」

日程…2003年9月9日～13日

会場…龍谷大学大宮学舎・瀬田学舎

③ 多くの研究者、一般の方々との認識を共有するため、広島市立大学との共催による国際シンポジウム「チベットの芸術と文化―その現在と未来」が2002年9月に龍谷大学大宮学舎清和館を会場として開催され、青木文教師収集資料などのチベット関連資料の特別展が開催された。

④ 故藤枝晃氏によって以下のように整理されている。
国外にあるもの

A群……………中国に保管されているもの

A-1群……………旅順博物館所蔵コレクション

A-2群……………北京国立図書館所蔵コレクション

B群……………韓国に保管されているもの

B群……………ソウル国立中央博物館所蔵コレクション

国内にあるもの

C群……………日本の国立博物館に保管されているもの

C-1群……………東京国立博物館所蔵コレクション

C-2群……………京都国立博物館所蔵コレクション

D群……………龍谷大学に保管されているもの

D-1群……………大谷家寄贈分（木箱二個内のコレクション）

D-2群……………探検隊将来敦煌写経若干巻（西域文化資料501-537）

D-3群……………橘瑞超氏寄贈敦煌写経六巻

D-4群……………吉川小一郎氏寄贈分（写真原板、流沙残闕）

D-5群……………堀賢雄、渡辺哲信の日記（『新西域記』未収分）

E群……………個人・機関の手にあるもの

藤枝晃「大谷コレクションの現状」『仏教東漸―祇園精舎から飛鳥まで』龍谷大学350周年記念学術企画出版編集委員会 1991, pp. 223-230

⑤ 佐藤長「青木がラサに入って、ダライの配慮により寄留したのは、貴族のヤプシプンカン家であった。この家が第

十一代ダライの出自した家であることは青木のいうごとくである。ヤプシは「ダライの実家」位の意味で、この名で呼ばれる家は他にも幾つかある。ペテックによれば、プンカンの名称は、プンツォクカンサル略であるという。また同氏の示す系譜によれば「青木は誰とも云っていないが」プンカン家の当主は、ダライの重臣プンカン・タシードルジェ（一八八八年生まれ）であった。（L. petech, *Aristocracy and Government of Tibet 1728-1959*, Rome, 1973, p. 27）（中公文庫版解説、pp. 376-377）

また、ラサ滞在時の青木文教師の日常や、帰国後の動静については、『日本西藏学会会報』第4号 1957. 10. 25に多田等観師、佐藤長氏、中根千枝氏の随想が掲載されている。

⑥ 青木文教『秘密国チベット』芙蓉書房出版、1995, p. 111

⑦ 青木文教前掲書、p. 256

⑧ 多田等観「ラッサ時代の青木文教さん」『日本西藏学会々報』4. pp. 1-2. 日本西藏学会、1957

⑨ 山口瑞鳳『チベット上』、東京大学出版会、1987

⑩ 青木文教師は、ラサでの生活について、「朝は午前七時前後に起床して散歩約一時間と洋折衷の簡単な食事を取り、九時より十二時までを勉強時間に充て、午後は一時頃昼飯の代わりに茶菓を喫し、その余の時間は多く訪問に費やし運動としては郊外散歩と乗馬の二つをえらんだ。夕飯は午後六時過ぎチベットと支那の折衷料理を常例とし時々自炊をしたこともある。夜は大抵十一時頃まで勉強し所要の事務と学科の補習に費やした。この調子で三年間続けることができたならばさらに数倍の学績を収めたであろうが、応接にいとまない程頻々として起こりくるラッサ社会の祭礼儀式は予をして局外におらしめなかった。公私共にその渦中にまき込まれて一年の約三分の一は藏人と一緒に呑気な怠惰な日を送らねばならなかった。この外毎月一兩回は宮殿、離宮を始め諸大臣、貴紳等を訪問する毎に数時間、半日、一日と費やした上に予がなまじ写真に興味をもっていたため、一人か二人の素人写真屋しかないとこのラッサでは、予のカメラが驚くべき活動をなし、無料撮影の写真師として忙殺されたるもまた大なる支障であった。しかしかように修学上に失った損害は活社会から得た知識経験で補われて余りあったと信ずる。pp. 262-263」と回想されている。

⑪ 日本印度学仏教学会第52回学術大会・創立50周年記念大会に併せて開催された特別展の目録『東京大学所蔵仏教関係貴重書展展示資料目録』東京大学附属図書館（2001年6月20日～7月4日）の斎藤明氏の記事を参照。

- ⑫ 佐々木高明「青本文教師とそのチベット将来資料」長野泰彦編「国立民族学博物館蔵青本文教師将来チベット民族資料目録」(『国立民族学博物館研究報告別冊』第1号)、1983, p.182
- ⑬ 佐々木高明前掲論文 p.182
- ⑭ 1999年度(平成11年度)も押し詰まった2000年2月26日に四箱を搬入、2000年3月22日に所蔵登録をされ、正式に龍谷大学大宮図書館所蔵となったものである。
- ⑮ 田中公明「タンカの世界―チベット仏教美術入門」山川出版社、2001
- ⑯ 山口瑞鳳『チベット上』(東洋叢書3)第一章「旅行者の目から」(入蔵した日本人)の項参照。東京大学出版会、1987, p.108